

沖縄 —新風土記—

写真は1958年刊行の岩波写真文庫復刻版。「山田洋次セレクション」の一冊として、2008年に発行された。選者からのメッセージ「OKINAWA」を紹介したい。

この本の真ん中あたりにある一枚の小ぶりのスナップ写真は「沖縄」ならぬ「OKINAWA」の、アメリカ軍支配下から、日本復帰以後今日にいたる歴史を象徴していて、ひと目見たら忘れられない。

海水浴場のさりげない風景。沖には白波を立てて走るヨット。砂浜や木陰に水着の白人の男女がのんびりと休暇を楽しんでいる。画面の中央の、連れの男と語り合っている女性の大胆な水着姿の後姿がなまめかしい。みんなアメリカ人。キャプションに「4万坪の「石川ビーチ」は米人以外は立入禁止」とある。ここは沖縄だから米人以外は沖縄県民である。つまり「日本人は立ち入り禁止」ということでもある。同じページにある米人経営のマーケットももちろんアメリカ人専用だろう。沖縄一の美田地帯だったという宜野湾村は、スマートな米軍住宅と飛行場が変わってしまい、先祖伝来の土地だけでなく墓地までが米軍のものとなってしまった。住宅の庭の芝生を刈ったり、米人家族の洗濯をしたり、軍用トラックやジープの運転手をしたりして暮らさざるを得なかった人たちの姿がさりげなく写されている。

1958年の発行だから敗戦から13年たっている。生き残った沖縄の人々は衣食住の上でようやく人間らしい暮らしが出来るようになった頃なのだろう。ここに写った沖縄の景色や人々の姿には、なにかほっとしたような、疲労感と安堵感の入り交じった透明な感じが漂っている。

国際通りにぼつぼつ店舗が建ちはじめた那覇市の中心地の俯瞰写真をみるとドキッとする。地平線の果てまで見事に樹木がないのだ。13年前、ここに地獄のような光景が繰り広げられていたことを想像しないわけにはいかない。同じことを激戦地だった浦添や伊江島の茫漠とした風景写真からも想像する。カメラマンはきっと、うなりをあげ



て飛んでくる砲弾の破裂音や機関銃の音、飛行機のエンジン、艦砲射撃、悲鳴、血しぶき、泥まみれの死骸—といった映像をファインダーの向こうに思い浮かべながらシャッターを押したに違いない。そのイメージが静かな画面を通して重苦しく伝わってくるような気がする。

写真集の終わりの方に沖縄の舞踊はじめ芸能が美しく撮影されていてほっとする。沖縄は昔から「芸能の島」と云われてきた。歌や踊りが巧みで、繊細な心を持つ人たちの穏やかな島であり、「不沈空母」などという言葉がもっともふさわしくない平和な島なのだ。

歴史的な出版物とも云うべき岩波写真文庫はこの「沖縄」285号など4冊をもって終わりを告げた。

(2017年8月25日)